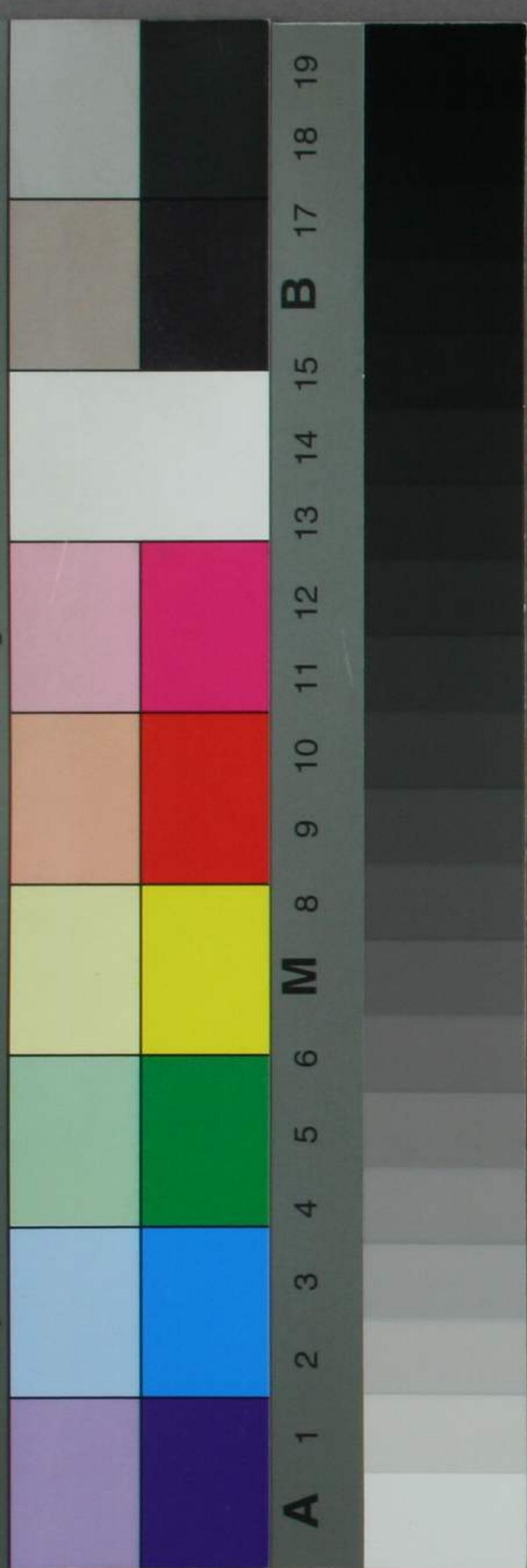
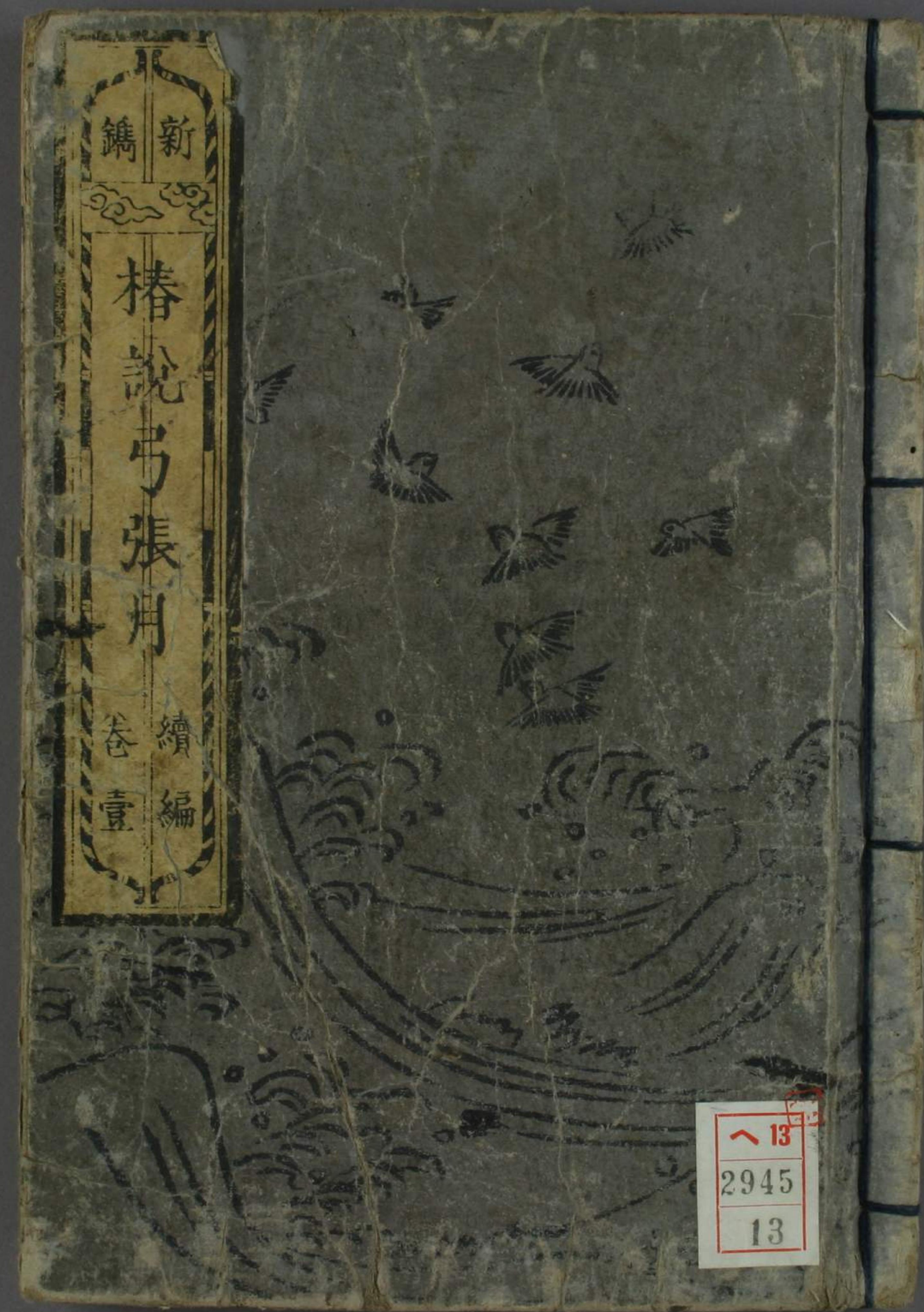


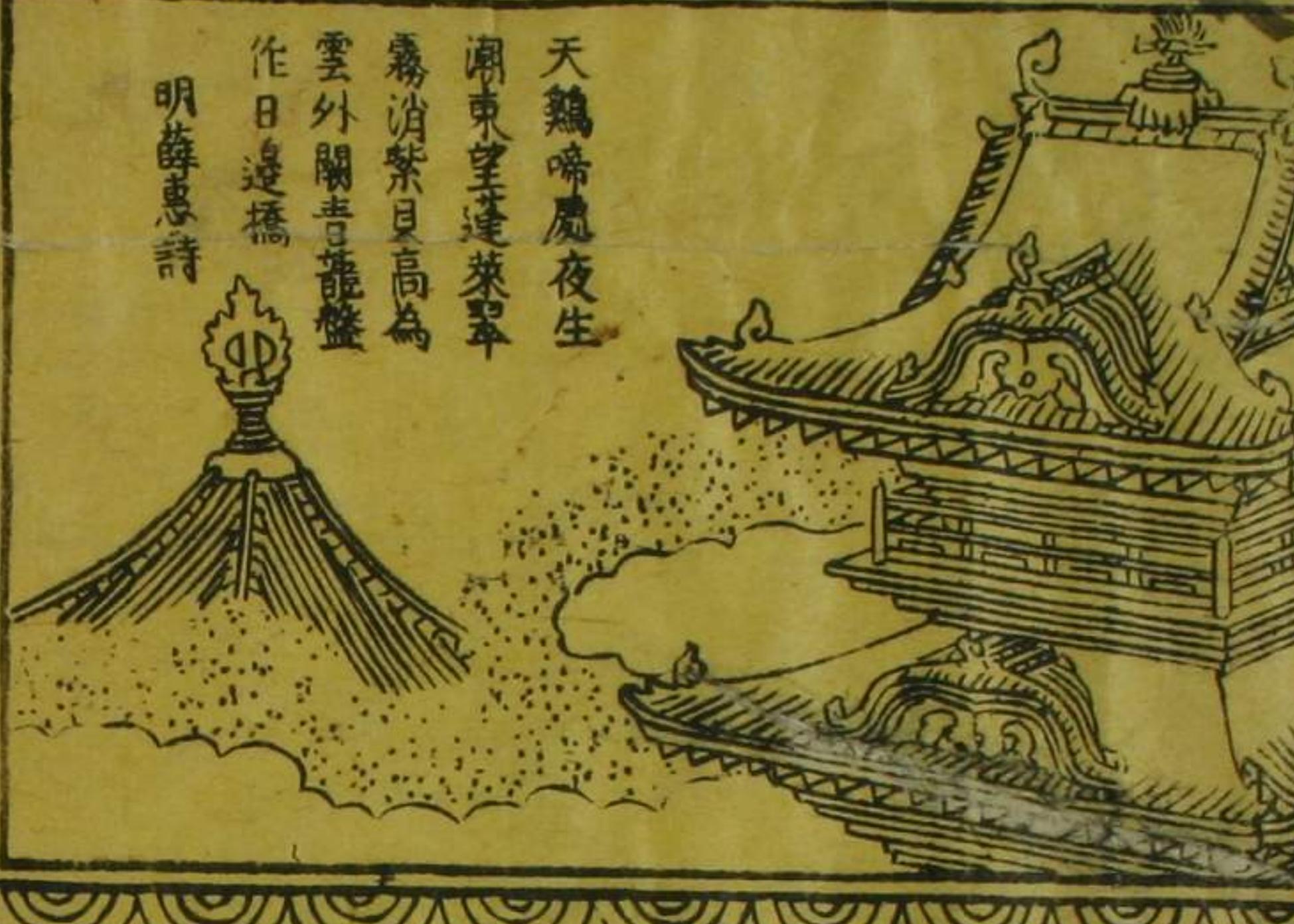
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN Tama



鎮西八郎 一株六冊
為朝外傳

月續弓張

曲亭主人著群鳳堂梓
葛飾北齋画群玉堂梓



天鵝啼處夜生
潮東望蓬萊翠
霧消繁貝高鳴
雲外關音龍盤

作日邊橋

明萬惠詩

鎮西八郎為朝外傳 樯說弓張月續編

拾遺考證

曲亭馬琴譏

昭和九年
七月九日
購求

吉野印

琉球國ハ薩摩の南より。三十六町と一里と定め。舟行百四十里。との
地南北八長六六十里東西僅二十里不過也。見え三十國會の説古琉球と呼
て。於此乃志麻よりもア。平判官康頼入道鬼界嶋よ綴れて歌ふ。
薩摩方沖の小嶋ふれりと親かへ告よ八重の潮風
源平盛衰記卷の七よ載。記者の云薩摩方ともハ總名シ鬼界
ミ十二の嶋ナレヤ。五嶋七嶋と名付。五嶋ハ日本より云云。平文推
量の説をりそひ。あたハ大洋の沖ナリ。而も琉球をいふ歟。小嶋ハ其
属嶋くる鬼界。傳信録琉球三十六嶋の圖説を閲。其の奇界亦
ナリ。去中山九百里六町定。鳥琉球東北最遠之界。人以手食

多々黒色。云云と見えり。かれ巴。鬼界。琉琉の属嶋と詠る。又。云
おほし。又神代紀小海宮。海郷とあれ。琉球のすなは。琉球談
ふ往せられ。下世俗龍宮と。海神の都する處。洋中海底別。
金殿玉樓あり。と。もへ傍も。既に御在枕が五難俎。論破。又
蟠龍子が俗説辨よ難。思按。龍宮へ琉球し。本朝怪談故事
小云。琉球神道記ふ云。琉球國の王宮。榜。瀧宮城と書。袋中
の曰。是が。琉球。龍宮の義。日通。ゆゑ。欽。國
東南ふ在。水府の内。極深の底。うと。龍宮と。うとも。故あれ哉。
天龍地龍の社あり。是を天妃といふ。今異國人の菩薩と稱す。ハ
足し。と。今試ふ。これ。据も。と。ハ。神代紀。所謂海宮。琉
球の。み。と。り。ん。も。亦。經。り。と。せ。ど。彦火火出見。尊。海神の女。豊玉
姫。

姫を娶て。海宮小苗て住み。と。年。そのうち。豊玉姫。女等。王依姫。と
得。風波を冒して。海邊小未到方。産小化して。龍となれ。條下。考合
き。小信録。中山世鑑を引く。琉球開闢の祖。阿廢。美父。と。三男
二女を生む。長女。君。ニ女を祝く。一人ハ天神となり。一人ハ海神
す。と。少を脇合。と。神代紀。ふり。海神ハ阿廢。美父。豊玉姫。と
君。王依姫。と。祝く。り。ん。も。その義遠。且。豊玉姫。と。龍と
化。海途を。國で。あり。王依姫。ハ苗。而。児鷗。鷗。草。膏。不合。尊。以。養
育。す。か。と。せ。る。一人ハ天神。王依。と。なり。一人。海神。豊玉
姫。と。ある。中山世鑑の。遠。ふ。よく。ゆ。亦。同書。云。琉球始名。流虬。隋使。羽
騎尉。朱寛。至國。于。萬濤。間。見。地。形。如。虬。龍。渟。水中。故名。徐
葆光云。隋書始見。則書流求。宋史。因之。元史。曰。璫求明洪



武中改琉球。とりえり。かれバ。乃邦を琉球を。宇苗麻乃文介ス於
哉迺志麻と呼び。彼处の土人。えぐもその國を稱して。屋其惹シヒ。
又流虬ともいふ。唐山にて隋の時。じりて流求と號す。元の時。名
瑠求と書。明の洪武年中。亦琉球と更。やうべ受く。今ハナヘ
琉球と喚く。その國の故。虬龍の水中ふ漂ひびとく。經をりて。流虬と名
づけられべ。中葉その王宮。虬龍宮とも稱する。すとし。虬龍ハ和訓みうち。
角を丸龍す。又和名鈔ふ。水神を美豆知と訓。又水神の女
象罔女といふ。神代紀。又見えり。これらとの縁故をりて。推とる。大
古よりれ海宮。今俗の稱。れ龍宮城。とる琉球のゆとあく。抑彼
國。北極地を出ること二十六度二分三釐。暖氣他國。小勝是く。
正月。小桃の花開。枇杷熟。十二月。小冰。蚊声を收。此傳信錄

月令の條下ふ見えり。その風俗年中行事。ホハ近曾琉球談と
いふ。又中山傳信錄。伏畧解。琉球事略。琉球聘使記。中山世
譜。定西法師傳。ホの説をまへ記されて。粗世俗のあるところが多は
く。あくまじつこの編。ハ為朝琉球ふ漂流。その子舜天。彼國
小王。よし。伏連。されば。更。小蛇足の辯。をうその。凡琉球國。ふ
三省の属府。そぞて二十七。これを間切と稱。間切ハ。この方。もいふ
郡縣の類。なづべ。首里をりて王宮。に恩納をりて五嶽の首。と。以
きの圖説の。どと。ハ傳信錄ふ見えり。この編の列傳。もの。従書
ふ載。人物。伏抜萃して。私よ名。伏設。も。又右。ふ圖。それ一張も
同書の。よ。摹。写。ふ。あくまじつ。の。な。よ。

海上蟠桃
月中丹桂
重結子
又生枝

釋天王源尊教



李子鶴

昨夜深
因雪第
寒兄少
在庭前
看玉樹
腸斷忙
連枝



李子龜

朦雲國師

曲路幾彎弓起
畢徑
虹樓一帶駕
波濤

紫中官南風原親方利勇



社稷保全綻死芳
名不墜綱常振立
雖亡生氣攸存

里之子松壽



中城按司毛國鼎

人心生一念天地
悉知善惡若無
報乾坤必有私



王妃中婦君

鎮西八郎爲朝外傳椿說弓張月續編總目錄

第三十一回

鳥朝水行赴京

白縕披瀾沒海

第三十二回

忠魂憑鰐赦幼主

第三十三回

毛國鼎忠說破利勇

第三十四回

寧王女捨身議赦民

第三十五回

真鶴孝烈赴北谷

第三十六回

尚寧王腰輿登高嶺

第三十七回

毛國鼎稟命赴小琉球

第三十八回

一夜夫婦守永訖

第三十九回

浦添山國鼎逢使者

第四十回

沃淚松壽擊廉夫人

第四十一回

顯神白縕祐寧王女

吉野

松壽月前躲妻屍

真鶴身後代主首

第四十二回

查國吉仗義戰中城

第四十三回

榜喰阿公棄赤子

第四十四回

兩孝子擡轎走越來

南寧王戲言喚禍

第四十五回

狹偽王子利勇聚軍兵

統計四十五回

其三十回以上出于前後二編

續編六冊目錄終

拾遺六冊

嗣出

鎮西八郎 椿說弓張月續編卷之一

東都曲亭主人編次

第三十一回

為朝水行より京ふ起く
白健瀬代披て海よ没む

人皇八十代高倉院の安永二年丙申の秋八月十五日のこと。よ
鎮西八郎為朝を肥後國芦北郡水脇の浦より船出して主従僅ふ
三十餘人滑毛革船に推渡す。清盛を狙撃。君父の冤を雪ふ
うて。船二艘小衆よりされ。その一艘が為朝白健瀬代と針盤
をそそぐ。大餘人の郎黨相従ひ。亦一艘が為朝の嫡男弁天丸
未子され。も白健の子とぞしてを大将にして。八町碑紀平次太夫高間
と母貴され。ふか嫡男と称を。太郎夫婦。高間が妻
太郎夫婦。高間が妻。ことこれ傳れ。十餘人の郎黨相従ひ。この日天

よく晴て一まい雲もなく。渺々とれ洋中。波静にして。順風。帆揚げ。日へ入る。月へ海より昇て。頃しも秋の最中。れば。金波。碧波。漏り。玉兔。浪を走る。冷風。夜。月。夕。らかくある。霧いとゆく。からて。曉。夜。そ潮。ふ。ひ。と。けん。午の比及。霧の霄。それと何處の。澳。とも。らひ。つ。う。時。ふ魚。ゆ。う。状。鯉の如く。はて。鳥の翼。ゆ。蒼文。白首。嘴赤く。甚。音。鳶。雞。よ。似。と。彼の上。群。り。あ。ぶ。こと。いく。ぞ。と。ひ。と。と。且て。水。回。猿。と。泡。どり。て。木。構。を。散。せ。れ。ど。移。の。海。蛇。浮。生。く。船。の。左。右。ふ。充。滿。く。それ。と。み。あ。ふ。ぞ。と。て。衆。皆。面。と。あ。じ。つ。ろ。ひ。惑。き。え。の。む。當。下。為。朝。へ。水。と。天。との。景。迹。小。目。と。つ。け。て。大。よ。驚。と。白。鷺。姐。凡。宣。す。それ。西。國。ふ。成。長。す。又。伊。豆。の。嶋。く。に。十。年。の。春。秋。が。く。し。か。ぐ。渡。海。の。風。信。自。然。ふ。く。し。大。約。南。海。も。三。月。清。明。の。し。地。氣。南。より。北。ふ。り。く。と。く。北。り。て。南。風。を。常。と。く。又。九。月。霜。降。の。後。地。氣。少。く。南。ふ。せ。く。と。り。て。北。風。を。常。と。い。だ。す。例。又。と。く。へ。風。の。怒。と。ど。る。と。と。な。し。と。れ。大。風。烈。い。を。颶。と。い。ふ。又。甚。あ。と。く。づ。胞。と。稱。ふ。颶。へ。常。み。襲。か。起。て。颶。と。漸。ゆ。て。來。くる。颶。と。瞬。の。うち。ふ。發。り。て。條。ふ。止。と。颶。へ。一。昏。夜。或。ハ。數。日。ほ。そ。き。は。止。ま。と。正。ニ。二。四。月。と。颶。お。け。く。五六。七。八。月。へ。颶。お。ほ。し。渡。海。の。私。颶。ふ。遇。し。と。へ。と。脱。ふ。こと。の。り。ア。颶。ふ。遇。し。と。の。富。が。と。し。十。月。北。風。常。ふ。化。る。ち。れ。ど。も。颶。胞。ふ。定。期。し。五六。七。八。月。へ。南。風。ふ。胞。あり。その。風。發。ら。と。それ。と。ふ。北。風。ま。ぐ。至。る。故。ト。東。南。ふ。又。移。す。と。南。と。な。り。亦。移。す。リ。ト。西南。と。す。颶。胞。の。じ。り。て。發。る。

さすがに船か。ひづれの雨。西岸る。その上に半天か一朶の雲出。りつ
断虹のこどれのあり。これのみ森なり。又船の起るこどれは帆のこれ
雲上べ。まほえ不及。稍鰐魚の尾ふくらみ雲とうれは。その前
象形。鰐魚を蟹ふ似て。南海より生す。十二の足腹の両旁より土眼
を背の上ふありて。その口へ腹の下ふあり。のりの海を過る。每小
相負ふ。背を示し。風を乘じて航行。海人これを鰐帆と呼ぶ。其
皮較甚堅。異國の人これを冠ふととひ。われそぞ入。今も
又鰐帆似。それ西半天下より。嘗て。船發らんとそれば海水穢れ
泡もて。海蛇夥水上ふ浮。文鰐魚群て。船工これを入る。
そむへ。ふくく怕と遠く慮りて。帆を收め。舵を嚴重にして。それ以避
ク準備速る。されば。私忽地す。傾覆すること。今その不祥

悉く備る。ものも。なし。そ帆をもうまく。とりてまたまへ。自縫姫を
さう。衆皆吉々振る。驚け。睞つ。帆を引む。そそ碇をもうえん
こそおふ。底ふくして。その綱。ごくごくもめぞれへ。といい。せん
と。いと周章。も。浩然。遙ふ後どく。けれ舜天丸の船。すうす
に。衆著て。間らく。艦。ひき。へ。町碑紀平次。高間太郎。ホ袖先。は。時
に。歸し。主の船。よ。對。そ。すう。ひゆ。今曉。う。彼霧。ゆく。な。ら。こ。あ。そ。
船のゆく所を。ち。う。い。東へ。卦。く。へ。船の南へ。流。それ。くる。と。ち。や。す
加旗。何とう。海の氣きの怪しく。見え。君。あく。い。う。お。匂。あ
や。ん。と。同。と。為。朝。そ。く。う。て。汝。ま。が。い。み。で。く。と。が。私。南へ。漂。流。せ。ふ
疑。ひ。う。故。い。う。ふ。と。な。れ。ば。文。鰐。魚。の。群。が。う。轟。が。そ。く。て。足。と。あ。れ。り。
彼。魚。の。南。海。よ。多。し。あり。ふ。薩。摩。深。を。ある。こと。數。十。里。ノ。ま。ぎ。

文鯉魚群飛

えよ。半天み怪しき雲あり。且水の上よ海蛇
夥しく出る。そ即惡風起りんともろの前
象され。今これを避んとするに船入る
へて港口に。只身を空して死ば俟つ。
時命の係ること。それか於くせんとぞを
あはれ。今まことに放ふくみうらと曰答うふ。
件の友人眉を顰め。あうとつとも知つ
これを防ぐ。故に智の足とぞれ小似る。船
大にすれば風波も輒く傾覆する至
らど。稚君のぬと。殿のぬと。船を船あく連
環し。衆人力を戮じて糟あらば。いうて必

死を脱とあり。と信じて。既に纏を
投げりとすれを。為朝急み押ぢり。汝達
の言差へ。親子をとも船よりて。その
厄難をやし。と宣ひ。と。究めて宣ひ。と。
とが主役二十餘人。命凶なるものゝ共
あじかの網小入る魚も。才二三ハ脱テ
タ。抑為朝伊豆の大嶋よりしと。之
うちゅう以下の七嶋小往來。早潮黒潮
の灘をすゞ骨とせど。千里の波濤を家と
て。一トも大風小吹流され。もろもろ
ア。皆是神仏の擁護あつ。仰さり。ある

齋
入
と
出

か。今、華洛ふ推渡く。君父の仇へ。清盛が粗暴とすに挾勢ふ
船をとり。恨つて。剣風濱の難ふ。親子主従悉く。大鳥の腹ふ葬れ。星
天うり余ね。そべて一年十二ヶ月。惡風の發る日あり。八月十五日と魁
星船と称そ。箕壁翼輪の四宿を。と同を起も。主船とも。我
これをちよどにあら。きの。魁星船の日期ふ船出にて。今日
ふ至く船よめ。とても脱がん。主従が命す。や。とし。人きふ其言
いを。訖ら。船の前後ふ龍あづれ。水の沸く。二丈瞬間ふ
白狼と吹耳の。徑とそられ。天驟ふ結陰。大雨盆を覆そび。ごとく陣
す。四方野干玉の。鳥夜とすりて。面がめと。送ふ。その人。
え。と。只声をあくべにして。おのく罵り。廻し。力を戮して。讐械を擣り。
命かぎりに。働く。も。風雨。まことに烈しくて。船を。只。目小跳。燒り浪。

を打ふ。と。あざく。されば。水を浚乾。そひ遑。衆皆瞑眩て撲地
と仰。舜天丸の衆きる。絶も。いづらぬ。たゞ。おぼつ。なきに。あり。も
く。へぞも。あら。其處。うりと。嘔じ。まど。縁。と。答。ま。そ。の。も。ねく。
吐嗟船と。目今傾覆。うそそ。うりける。當下白縫。潮垂。両の
袖を絞。あげ。うち。一足を踏。うちて。声。が。う。と。て。御曹司。かくて
万死。よ。一生。と。か。と。し。傳。景行天皇の四十年。日本武尊。東夷
征伐の折。う。と。相模。より。船出。じ。と。上総。へ。と。て。赴。た。ま。ふ。ふ。暴風。忽地
か。起。ま。る。皇子の。船漂蕩。し。既。と。傾覆。と。ん。とも。う。り。し。う。は。その妃
茅嶋。橘姫。命。の。宿。忍山。皇子に代。て。入水。して。うせ。ま。う。る。よ。う
て。風波。立地。よ。転。ふ。と。て。船。恙。う。岸。ふ。若。く。こと。と。ひ。う。と。と。君。が
武勇。日本武尊。ふ。物。り。う。だ。安。が。心。操。房。橘。姫。小。及。ぞ。と。も。此。身。を



犧として海神へ獻らる。風の止ずるよりやうあれ往かる夫婦の再會
も量りに。とろひにけりつるに。讚岐院の荒神灵。おほんりつじ
ゆくして。環會ちり。年々の懶さをも語慰めりて。舞天丸とくが子
え入番。七年グ經奇眉をすりて。既ふ志をいじこう。夫婦親子れ縁惜
哀別離苦のすかとみさん。と、いひし竭そぞうへげうねどぞうえ
むとうを捨く。君り後すすむに舞天丸も。辛じて脱きぬく。足よま
僥倖へまし。今つもやまの暇をまくるを。としひも累も。蹴り入ん
にしおふを。る朝連忙しく抱き住む。心操へると。我
勅効の配軍として。日本武のいもへ。手比んをいともかくに。夫婦
りうちもに死うれ死うん。廉忽の拳動あまか。と理を述べざぶや
まへ。白縫を。もう落る涙を。押拭ひ。このことすらを絶一言の情へ
鮮ううるのか。妾徳岐小めりしよ。新院面あくすすまくし
うのうけり。汝ホ夫婦の縁一既モ終れども。その志の切ひをぎく。
下みハ環會をぞし。そればあくび夫よのくも。又いく絆もく離別
せん。努力くらひるふうなれと説示し。うるハクのふのみくける
やう。かれふい。君も只ひ當りうべたふ。そくわすれいと。却は。源家
氏の太神。男山正ハ幡肥後國おほさ鉢す。阿蘇の明神。アシテ。讚岐
院の荒神。冥良懸受納の曉をえし。ハ大龍王感應あつて。良くを
じ。松中の黨ハさううなり。つゞ子の船もまく。奏のうへゆふをせ
まへと高すに祈請。うそあられし袖そぞ拂ひ。瀬を披き。千尋
の底へ舟を跳らして役をふ。あつれそくがと寂期す。あつれども風
雨へまほ止として。海の鳴音凄く。舟の鞠を蹴るごとく。高く揚げて

半天、お至り。或へ傾へあらひて、浪よりも低く沈もしやうと、湯もす
き。餘人の即黨は白縫入水あまかとりども、縫ふ應ふだをつて。今
はまよひとえ候ふをじうして、やうやくに身を起し。吾们木原山ふ
ありつゝしより以東、余ハ君ふたてまづりぬ。倘琴高が鯉み降り。
列子が風ふ御ふああトびへ脱とまふ。おはしき。誘う人死出
の先登つゝまづる。どりとも黒ぞ。おのく刀を引抜て。或もに
らぐ。或へ腹うに切り。筋より附墮て。名をとふあらぬ。荒原の底
の骨黨が入水そろそろ。数回歎息し。そもそも清盛が運の強
さよ。為朝必死の兵士をみて。華洛へ潜のぼる。そのあへ這奴が
首をひく。龍神は人世まつれて。ゆごと平氏ふ荷擔うきよ。余
運の竭るとどう。世をも人々も恨しもよし。偕老の妻を殺し。ま
足のやひをほこれ。即黨をうしろひつ。ひきぞうかくてあぐに舜天丸
がねへうなづく。その生死をもふざれども。今へもや大魚の腹中
ふゆくとどくん。やひとも。荒磯よ殿の手がね。悪ようける。お
す宿志が果えとまれ時、お臨み。風波ふ進退窓アそ。世ふあう人も
ゆう海の八重の潮踏ふ沈ん。己うくとむくとら。腹を切んに
ちが折ら。怪しき。お電閃たまう。去雲霞靄と私の上ふ天降りて。
異類異形の天狗とも舷ふまやうれ。闇伽を吐。蛇を把りそむく。異
み傾くとくれ。私忽地もあくまにして走ること甚速し。時ふ天狗。異
口同音ふゆり。おはせへ讚岐院の神勅と稟。吾黨うそに來うる。私
を考る。為朝卒余ふ死をべうとば。夫豪傑の士志を舒。名と揚へとす



讃岐院の
眞助
為朝の船を
行々

とて。天主百折千磨の憂苦嘆に。その筋骨を堅くし。事の情
か波らしむ壁。梅花の冬ふ食く。雪霜ふ瘦く。春にあく。
香氣百花の長くれど。しまで。あらう燒るらざる。こりふ声のこへ
耳ふ入ると。為朝へ夢のくわじつ。それもあく。せ然。畢竟為朝
の安危如何。次の巻へは讀ゆくあぐし。

第三十二回 忠魂鷦ふ憑く幼主を救ふ
神仙氣と吹く歎く歎折を甦る

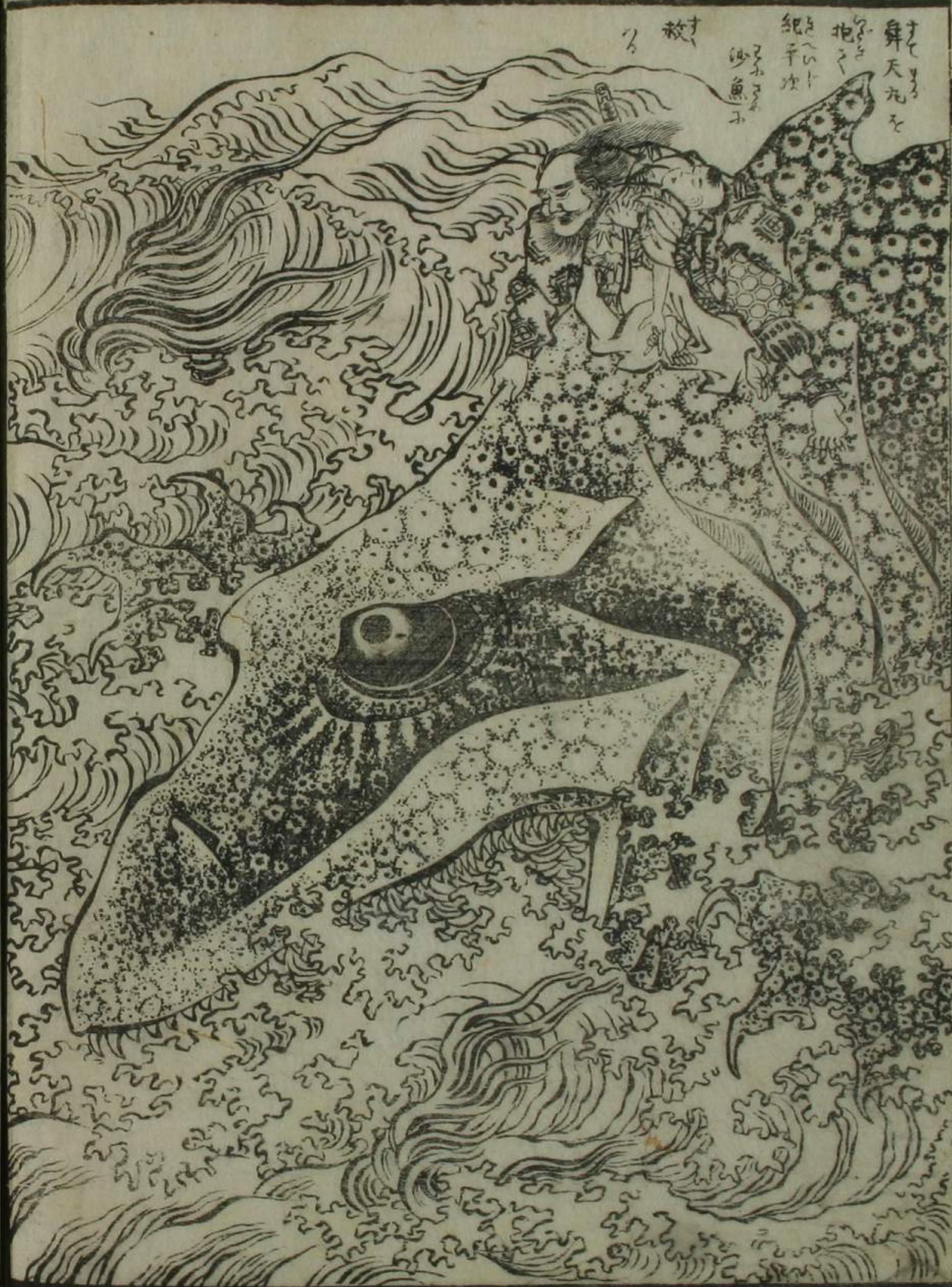
そもそも舜天丸の船。艤の覆ひとれ。あふ浪。搖。障られ。其所とも
あふ漂蕩ほどに。船打とく。りよそぞみうじふ。紀平治と舜天丸が
右。左。板子とよひ。袂えど。袖ふあすゆ。神仙を祈念。且
あも。朝白旗のえも。おがつうなづきど。それえど。ひらびと。もふ。皇めふ
ぞ。高間太郎と。磯萩。こども。十餘人の傍輩。励して。くば先途
と。働く。力究。ア勢ひ竭く。即座。死をみる。五七人。か及べ。甚
患難比る。ふりの。おうれし。元。必死と。ひ定められ。主従。今ま
金と惜しみ。足。敵ふ當りて。志を。立。武名を。後の。せ。運
もみもあく。て。いきば。青海原の底。ふ沈。三果。なんの。打惜
く。西も東も。あり。あら。稚君を。さん。うしきひ。あく。ん。あ。痛
あ。ふ。お。と。叫べ。声も。たゞ。そ。磯と。輶びく。起。ま。の。力も
も。そく。あ。海。小。弘誓の。船を。まつ。かり。紀平治も。今へ。うて。腰ふ
うたの。あ。舜天丸。ふ。う。す。かる。も。あ。ひ。と。そ。ひ。念佛
と。の。お。船を。巖。よ。控と。當り。て。滅。裏。く。と。碎。散。う。浪。うち。被。ぐ。主
だ。うら。あ。げ。られて。ハ。又。沈。し。生。死。流。轉。の。ハ。苦。海。屍。ハ。相。抱。三。て

濤浪の灘まよ漂よひ魂たまを相伴とも。海翁の堂どう至いた人憐うなづむ。嗚呼悲かなむ。そぞ中なかに高間たかま大おほ郎ろう利り壯さう俊じゆ。船ふねの碎くずれを又また。磯萩いそはぎとと組くみあいし波なみの底そこふ洗あらわす。船ふねをも巖いわの上うへふらう揚あげられ。からうして死死を脱ぬけざれども。外ほかふ助すけれ船ふねも。舜天じゆてんを入水いりみずひつる。後あと見みる人ひと不忠ふちゆう。稚君わらわのゆゆを悔くやてかかくくぞ。大殿だいだいの山船さんぶね。今いまるに傾覆くわいふく。として漂よひうり。子こが魂魄こんぱくりづらりづらす。守護しゆごす。従とも人ひと鳴なきなり。悉すべ岸きしみよせ進すすへせうん。武士ぶしの家いえふ生うまれし。兄おの病びょうて死死す。本もと意ねうふねど。りひりひが溺なま死死せん。吾妹わいめ子こをも。もやかもやかて自殺じそくせ。ぞ。そにへぬぬす。うううう。ひき。ひき。ハキモハキモ。とと。りふ声こゑも。うううう。夫めの心中じゆう推量すいりょう。磯萩いそはぎの潮しお垂たれ。額ひたいの髪かみをかきあげて。ひと苦くさしげ。小息いきが吹ふ。嬪夫ひめふの契締けいぢを。夫めの刃はみかれ事こと。過すぎせあふ。結むすびれん縁えんとそ喜うれい。あうあれど遺憾いがん。そらの年とし。かん傍そば。あくあくとして。給あた奉まつせし白雉しらき姫ひめ。亦因いな高たかき。君きみの。いふななく。たゞふ。そもあくあく。それそんかかて。うむ。ちく。傳つたさ。よ。稚君わらわを浪なみふ。とと。また身みの後のち。小冥土おめいと。君きみは夫婦ふうふ。いふ。ああつ。そとそ。同ひとと。うべ。そこそ面おもてを。ほん。せうて。吾われの魂たま。おん亡骸むたがい。そり衛えい賓ひん。舊きゅうの浦うら回まわふ。著きまわまわせ。水みず朕わたくし人の。まと借りて。花はなサ。そく。般若はんにゃくの航こうふ。衆しゆかえ。彼岸ひがんふ。登のまま。世よみある。とたへ教おしふ。とと。憂うきふへくれ。吾われ们みどり。そく。忠信ちゆうしん節せつ義ぎ。そん。人ひとをうふ。竭ひきえん。ひける。况あらへ。今いまも昔むかも。例たとへ。耶や。名なづ。みづれ。そひ。小帆君こはんぐん。の心こころ烈れつそ。女めのこのが。こそと。闇くろれ。處ところを照てし。神かみも。仏ぶつも。あり。あらわ。

ありつゝかゑ厄難を。救ひきへねひいづみぞや。應驗とす。冥助とす。物の奇特もなれ世。と恨の堪りかき。説い。王。身。血の涙。巖小落そひ方。是彼東海。あり。といふ珊瑚の技。ふ異なり。高間。これを。さてうち。島。それも右。こそもり。され入。そ寂期の一念。みよ。生。死。ゆき。じ浪の輪。すれ。隙。追著。ちゆく。欲。みよ。歎。と。送。諫。めい。と。うれし。と。白。す。な。破。萩。が。胸。あ。う。内。く。刀。尖。く。と。ほ。く。一。下。あ。ぐ。こと。漬。血。刀。と。う。あ。く。一。つ。高間太郎。も。腹。一。文字。み。か。き。切。く。され。ば。云。常。の。風。を。そ。せ。こ。檣。と。よ。く。紅蓮の浪。の。下。ふ。布。と。く。夫。婦。が。屍。と。沈。と。果。る。ぞ。哀。と。よ。う。この。時。の。景。迹。を。そ。一。べ。と。え。と。め。づ。ば。さ。れ。ど。後。ふ。か。く。や。と。推。量。ア。孤。ち。う。く。其。と。つ。忠。苦。節。を。語。り。続。く。物。み。と。人。書。記。一。世。の。順。と。な。わ。る。う。べ。し。是。

さておれ八町。礎紀平次。もし。琉球那覇の港。すく。為朝の船。ふ後し。付。邊。ふ。浪。路。を。隔。と。れ。を。撇。く。洒。た。著。わ。れ。水戯の達者。り。れ。ば。この。日。船。の。破。り。バ。え。そ。ア。づ。う。水。中。に。跳。り。入。り。た。年。も。ハ。板。子。波。う。ん。と。角。を。漂。し。右。ま。あ。舜。天。を。高。く。に。揚。て。波。風。を。物。と。も。せ。ぞ。命。の。充。ん。場。り。と。泗。た。る。が。只。渺。く。と。れ。青海原。ふ。広。て。ゆ。く。至。嶋。と。ふ。え。え。と。兩。と。へ。い。く。障。ち。だ。て。海。の。面。く。う。け。と。バ。あ。じ。想。ふ。べ。と。巖。う。と。探。り。當。ら。と。心。の。こ。へ。猛。れ。ど。そ。の。身。鉄。石。み。あ。ト。ば。れ。ば。終。ふ。力。衰。へ。暎。撓。う。て。吐。嗟。弱。と。死。そ。へ。う。む。に。折。う。途。前。面。み。を。め。の。う。て。冕。く。と。光。り。り。く。この。神。佛。の。擁。護。み。く。倘。稚。君。の。命。助。ア。う。く。う。る。と。欲。く。く。ゆ。く。じ。心。力。が。励。し。辛。じ。て。間。ら。か。く。が。お。う。に。晴。を。定。め。く。され。を。それ。へ。こ。れ。い。く。そ。の。長。文。余。も。あ。ト。ん。と。と。ん。と。お。び。と。れ。集。





半身を水の上にあらず。しつ。その赫奕くれりのハ。彼り眼の光るあひを
あり。され。紀平次ハ。これをアシテ。大。よ驚き。嗚呼。主従この惡魚の腹
を肥ちよ。腰。刀ハ。佩。うれども。稚君。抱。と。縛りて。いつで。うき。か。と。殺
し。ん。ば。や殺。一。ひきとも。外。援。れ。の。な。れ。ど。とても。活。き。た。方。も
あ。う。ぬ。ふ。怕。う。こと。う。と。う。く。よ。ら。ひ。く。え。か。た。も。す。ぐ。退。き。も。せ。ど。
あ。う。う。浪。間。が。凹。ぐ。わ。ど。に。惡。魚。を。忽。地。紀。平。次。を。見。く。崖。ふ。ひ。に。た
に。が。岡。た。劍。を。裁。う。べ。う。れ。て。く。ん。て。齒。を。あ。ハ。潮。を。蹴。う。て。く。こ。う。う
あ。る。折。く。も。あ。れ。高。間。夫。婦。が。形。體。煙。の。こ。く。立。あ。づ。れ。俄。頃。よ。う
の。燒。火。と。な。く。悪。魚。の。口。入。る。と。え。し。怪。し。た。う。ね。曉。見。く。心。思。へ。
猛。ふ。岡。を。る。箭。が。岡。浪。を。潛。く。て。紀。平。次。を。被。さ。あ。げ。サ。ち。ト。海。上
小。助。乗。て。走。る。ゆ。船。う。も。速。う。け。紀。平。次。を。この。欣。勢。と。て。く。る。

且怪ニ且故び。そへ高間磯萩本。その身溺ミ死モといへ。ニモ忠魂
この大魚モ鳴リ。雅君ハ枚ヒセキト。ひし唐土の韓退之へ文を報
アリ。鷦を諭し。遠くこれを退けしと。笑テハ脣つゝに高間夫婦も
異國ム。アリガタクれべん忠臣ノ歌と。頗小感涙をとぶやき。又今
さうに為朝の往方いふとぞひす。安き公モセモうろ。さう後ふ
その日も暮れ。風波すりやくに軟に。沙魚へ。いも。サリ。サリ。サ
通背浪の上へ走り。天へやのくと明る比。父どもあはれ。鳴ふ涸き
著。浪打際不改。よて動ひ。紀平次モその意を以て。すがて荒磯
か登りつ。大魚を見えりて。高間氏夫婦の忠魂ひにしき
あく。大魚モ附托し。必死ともひ定め。雅君と故ひ生むせみ誰
うち。右小助。盲龜の浮木不遇つるより。おは稀。おれ僕。偉。是

全く雅君の洪福ふよるのうら。老。が。ち。と。れ。紀。平。次。と。惜。く。ね。お
を存命。可惜夫婦と三十。も。足。も。る。齡。を。一。期。は。して。千。伎。の。底。コ。流
えりん。身。か。せ。ぬ。世。な。り。死。生死道を異ふされば。とく。ゆ。別を
決する。こも。どう。易。れ。雅君と。ともかくもして。養育さん。只。公。と
おれ。曹司の。お。ね。す。り。彼をおくりし。これを。お。り。胸。苦。し。く。祭
え。と。あ。人。お。ね。り。ふ。と。く。岬。が。ま。し。た。健。男。の。誠。見。る。く。や。凄。じ。大。魚
も。潮。か。吹。く。と。も。に。愁。る。氣。色。う。り。しげ。逡。巡。し。て。一。反。沖。の方
へ。退。き。つ。二。の。烽。火。水。面。お。因。た。出。大。魚。と。さ。う。が。り。烽。火。え。消。て
あ。と。迹。う。く。め。う。み。ち。り。と。あ。と。れ。ま。で。も。紀。平。次。ハ。舜。天。九。と。懷。お。楚。と。抱
く。る。じ。り。そ。公。お。ら。か。そ。汀。の。石。お。尻。を。う。る。孺。君。ハ。い。ふ。お。ひ。こ。よ。ん。
生死の隙も。あり。ま。で。り。ま。で。う。睡。り。ま。ふ。そ。や。是。え。と。い。い。う。そ。

つし。こに覗け。痛じてうれ舜天たと。りの裡ふう縛切。え
は。と。そ。う。うち驚き。慌しく懷よりかた出して。声を惜しみ。泣く。
磯馳松風岸うら浪の外。あ。絶え。いとへなく。砂ふはじる貝のうらふ。
昨夜の雨の滴り水を。いろと。変る脣ふ。まし傾けても令せても。
咽喉あく下らで。こよかくふ。落のうおのが涙す。あぐくろて目が
押挾ひかくある。ざき事ねづら。大魚の奇特み。うりともと。憑ひひ
なぐれひく。存命て何えん。高間夫婦もいと恨めし。ひの八千
遍百千遍。縦一年。二箇月。泣ばとて叫へばとて。後果あん。魂の猪。
繫多た。詠べ。術へあらび。抑うへ何國ぞや。人ほひ鳴とへ見えねども。
せちて亡骸を。瘞。腹うなぎて三途の川も。死ぬの山跡も。紀平次
う。負ふ。越え。僕見。そがこれハ。じやう。主従の縁。游うて。二世

の宿因違り。導す。地菩薩。南無阿弥陀佛と。念。瞻仰
視。と。嶋山の。高峯。かく。あく。雲も。夢の迹。なれたら。そりひ。
かり。ぬき。あく。朝日のかこと。故御と。ゆのこみて。同ふを。見
ぬ。木の子草花芳しく。人ふ。おそれ。鳥の声。耳。豈。瀧津瀬
の外ふ訪へ。き家も。浩。處。峯吹ふ。うと。風の。う。幽々
荒磯。ゆも。潮垂衣苔。行ひ。と。生。の。あ。と。こ。仙人の崖
や。ゆ。讀經の聲。紀平次。と。耳。伏。側。と。あ。不審。人も。かよ。り。ね
ゆ。の。外。ふ。訪。へ。巨海の外。ふ。十。の。洲。あり。人迹の。希。絶。する。こ。ころ
ゆ。して。その中。ゆ。神仙。あり。丹。を。煉。真。火。終。天地。とも。小。壽。す。一。セ
り。ゆ。き。く。ふ。う。不死の。あ。と。ボ。う。とい。説。も。誣。ご。し。と。あ。う
ご。う。觀音大士の。お。じ。ま。を。補陀落山み。や。ゆ。ん。ぢ。ぐ。か。く。仙

境に入りゆること幸けれ。索ゆとて縁由を愁訴し。灵奇回陽の葉
も驗る。稚君の余数とあ場すかとも。因果の道理を聽せん。
品ひあるよとがともなり。落獄の苦患を脱して天堂に陞
りてゐるやう。と云ふ。あり。と云ふ。落延てこの嶋ふ漂入る。身も。そのうしあり。志
りあり。と云ふ。その僕屍を抱とあけ。読經の声を公
あく。又ふ路を磯山を。辛じて松柏の巖ふ縁に。森光の洞
を繞り。攀登されば。灵風地ふ觸りて。紫蘭の室。入り。又
彩雲天ふ遍りて。春花の林。おどり似たり。向上すが。數千仞の阪登
路滑れ。直下せば。十万里の波濤。天。続る。こうしく。二十町
登り。東つりん。とらふ比白鹿木立の間。より走り出。紀平次が前
ふくらむ。御導とそむふ仰り。うめ至る。紀平次の身體猛よ軽く
ありて。只顧。驚嘆。巖の下小蹊踞して。経を読むとまづ
きじありて。老翁を。あぐふ。経巻をすたがまし。紀平次はや
あく。對ひすくて再拜し。神仙ねぐらへ。この小児を活しま。活しま
と叫び。老翁はこれをひき。莞尔とうち笑ひ。汝へられハ町砾
紀平次太夫を抱とされ候子ハ。郎は曹司の子。舜天丸。いふべや。
近くあれと。の聰察。考め。視るがおとぎれ。紀平次いふ
こそと。さゆの風波の。小舟を破られ。こく漂泊あられ。五一十六告
れ。老翁うち白頭。汝やと。常言ふも。若中の苦と嘆して。人の上

おほえと。須臾の間。山巔まで。登果。どうぞ。ハ。かとうの老翁。紅帽に
載た鶴蓑を被て。巔の上ふ端坐せり。あの形容。頭は長くして。身はほ
眼秀眉鬚白く。童顔仙骨。ぬくと。紀平次も。その神仙なるべ
ありて。只顧。驚嘆。巖の下小蹊踞して。経を読むとまづ
きじありて。老翁を。あぐふ。経巻をすたがまし。紀平次はや
あく。對ひすくて再拜し。神仙ねぐらへ。この小児を活しま。活しま
と叫び。老翁はこれをひき。莞尔とうち笑ひ。汝へられハ町砾
紀平次太夫を抱とされ候子ハ。郎は曹司の子。舜天丸。いふべや。
近くあれと。の聰察。考め。視るがおとぎれ。紀平次いふ
こそと。さゆの風波の。小舟を破られ。こく漂泊あられ。五一十六告
れ。老翁うち白頭。汝やと。常言ふも。若中の苦と嘆して。人の上

の人にとたるをじとりへり。苦樂時き。死生命あり。今その児を相そふ。
曩は水ふ落モ驚死モとひへども。命數のまご竭モ。これを救ふる事いと
易し。こへよせよといふ。紀平次ハ天み致ひ地より喜び。忙しく舞天丸
を老翁の膝の上ふね乗しかば。老翁の手ぐて抱きもろて。あ口中よおの
が息を吹入へし。奇なるうね舜天丸へ勿然として蘇生す。一声高く絶
叫を。搖揚て舞をほどに立地ふ泣止く。生平み異ことれをもへば。
紀平次ハあすりの喜しき。不思えよ涙にしづて。老翁を數回伏かす。
とし神仙の庇よよび。枯木の鳥の水ふ躍る。この僥倖へめぐが
じ。とも老翁へひうする神ふておりてトん。此嶋の名もやうよじ。もし
じ。とも老翁答て。それハ名もゆく民もゆし。源家ふ舊好ゆく
あへじ。といふ。老翁答て。それハ名もゆく民もゆし。源家ふ舊好ゆく
りて。緯のくふ及べるのこ。この地方へ姑巴汎麻と名づ。琉球國中山の
正西ふ當て四十八里六十町一里をりつてこれを定む。信銀書
唐山の里数をりて記せり。今琉球道と船いひし、よりほひ人
はしとへがし。海小珊瑚あり。山小仙桃あり。その果を食ふものへ飢毛究々
壽壽しこの嶋ふ白鹿あり。山小仙桃あり。その果を食ふものへ飢毛究々
琉球の屬嶋これ。姑米山ふ相近し。大約琉球小三十六の屬嶋あり。先東
の方小四の嶋あり。第一を久高と名く。琉球國中山の東十四里半
當て。六十町を一里にしてこれを定む。赤粳米黄小禾あり。海藻ふ海帶菜
あり。魚ふ龍鰐五色魚。佳蘿魚あり。本黑饅魚と名く。大なるもの
長八九尺。その肉を割く腊も山ふ螺石多し。第二を津堅と名く。中山
の東三里半。第三を濱嶋と名く。南北二嶋。中山の東三里半。半
あり。第四を伊計嶋と名く。中山の東三里半。三の嶋の產物姑達
佳所謂。小も。ものいひどまも又相似く。亦正西のかくふとの嶋あり。
佳所謂。小も。ものいひどまも又相似く。亦正西のかくふとの嶋あり。

第一を馬齒山と名く。この嶋二つみとされて。東馬齒山ふ大小五の嶋
あり。牛馬粟布文貝子ヤミム螺怪石を産す。西馬齒山み大小四の嶋あり。
こく小座間美渡嘉敷ホの間切あり。琉球より十六の間切あり。これ西府ふれあひば
族の類。この嶋の人毛黒し。よく漁りて水を囚む。ふく没む。山下の海底ふ
きくべし。海松あり。彼嶋人これをとりて生活とも馬齒より生じ。海松ハその之
久しくして退ひ。味最佳。又海螺を産す。山ふ鹿多し。この処姑米山
を走る。遠うトビ。第二を姑米山と名く。中山を走ると四十八里。安河。
具志川。仲里。二つの間切あり。山の形勢雄じて拔五穀。土
綿。繭。紬。白紙。蠟燭。螺魚。ホの物を産す。山ふ雞豚。牛馬多し。又海
小黑魚。あり。このりの好て水の上ふねぶ。それを墨魚と名く。又西北
五ツの嶋あり。第一を度那奇山と名く。姑米山と遠うトビ。山ふ牛馬多し。

第二を粟國嶋と名く。物のひよこは姑米山の人と相似たり。との山の
鐵樹他所み生ざれりふ勝なり。山ふ永多ヒ。第ニを伊江嶋と名く。
中山北山の間うる。小石山にして。四方ハ黄沙す。潮の漲るとて三四十
町を隔。水の退くとて徒涉して至れし。山ふ稻田あり。黍稷豆麥を
産す。第四を葉壁土山と名く。又伊平屋嶋とも称す。中山の西北三十
里もあり。この島の宋最佳。麥稷。粱豆。棉花。蕉絲。海膽。毛魚あり。嶋
の中ふ一つの山あり。宛村として齋の如一。茅五を疏黃山と名く。又黑鳴
と称す。山ふ多し。因て多くあり。中山の西北二十里也。又
姑米山と南北相峙。山ふ草木みし。採硫磺戸四十餘家あり。その人眼目
へどる羊の如くにして精明うべし。それ硫磺の氣ふ蒸る故う。ちつた
ふ山あり。これを灰堆山といふ。又東北ふ八の嶋あり。第一を由論と

毛魚の味方
かぶら
えんざと又
あとうと、お
あくびし
竹信錄小
毛魚細小。
外視六
二咀頭
有味七月祖
前後五日
八朔前後五
日於海中
雜陣ラ出
他月則否
モツク

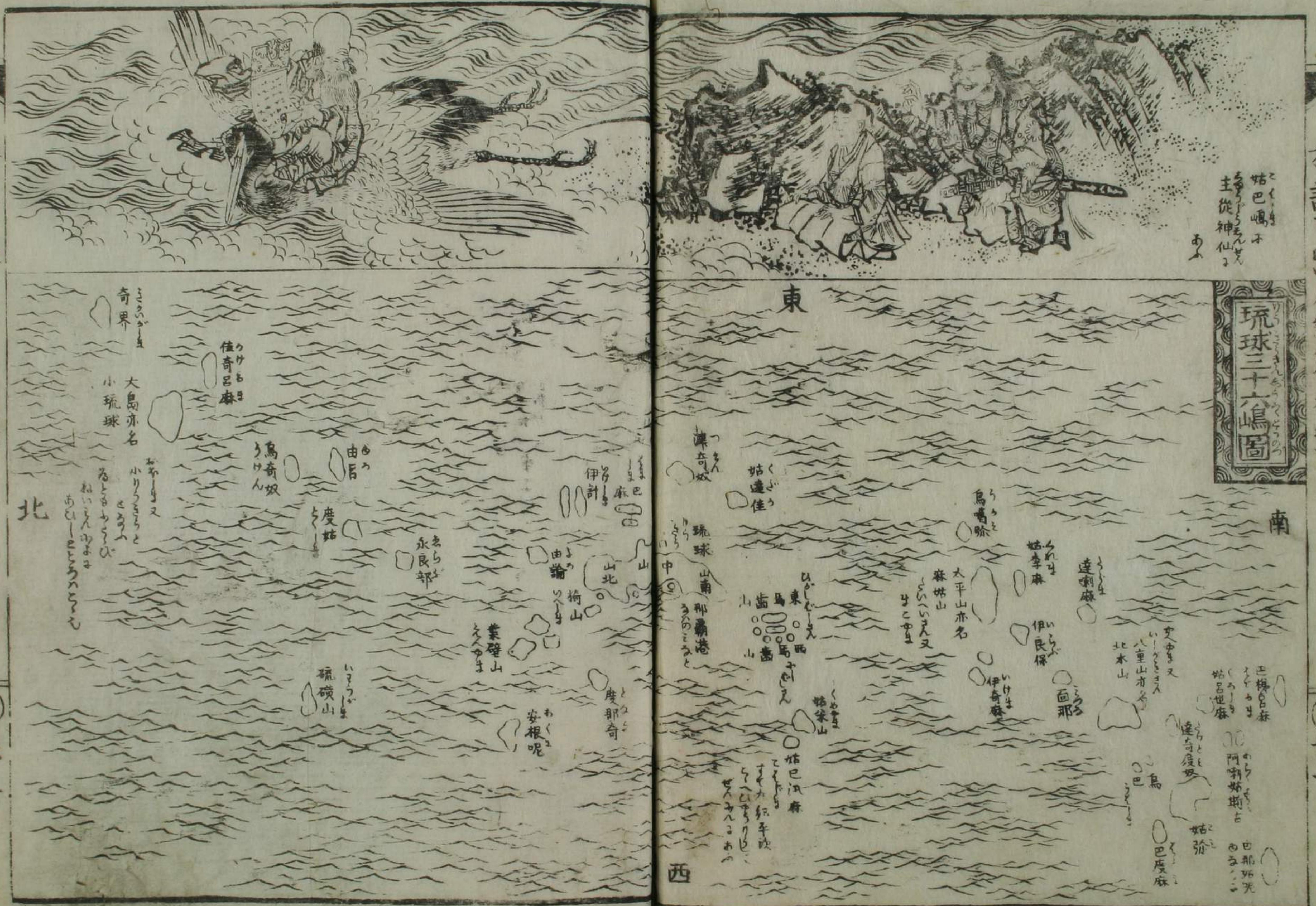
名く。中山の東北五十里もあり。芭蕉櫻木多し。第二を承良部と名く。
或々訛る伊蘭埠と称す。中山の東北五十五里より。第三を徳鳴
と名く。中山の東北六十里もあり。第四を由呂と名く。度姑嶺の東
北四里あり。第五を鳥奇奴と名く。中山の東北七十七里六町あり。
第六を佳奇呂麻と名ふ。中山の東北七十七里より。第七を大鳴と
名く。度姑嶺の東北あり。中山を去りて八拾里琉球より水行二日
にて達るべし。その嶺長サ十六里。七つの間切を分つ。西間切東間切。笠
利名瀨屋喜住用古見木の間切是なり。彼嶺人云々小琉球と
称ハ二百餘の村あり。米粟豆薯蕃薯木綿芭蕉羅漢松桑
竹牛馬羊犬猪雞山猪兔鷺鶩鷺野鴨鷺鷲雀鴉あり。又海
底く称するもの。これ螺の類たり。又紅櫻黒櫻檜と稱れ油樹あり。

その子を油小搾る。この外菓子小搾子あり。又焼酒黒糖蘇鉢木皆
されあり。又島小二つの山ありて清水山菊花山永明山と名く。又
島の北二里許み大なる石あり。形圓柱のじくにして。その高サ百尺
云々赤瀨の碑と稱す。いにし國王の龜祖天孫氏の建るところなり。
石の面ふ文字を勒せ。只美婦人の形を刻り。その容止活潑
がごとく。いと愛々そべし。石も紫色互して光澤あり。この邊と云へて
人居なし。安祖大嶺を本小琉球と名く。為朝琉球へ渡り。すこぶらへ
ざだ。を鬼界と名づく。中山を去りて九拾里琉球東北最遠の界
なり。この嶺人食ふ小著み。手をりつて。俊實の滴れく。こゝろ産
櫻木至極の良材なり。夥の年を経れども朽蠹不。その光澤すもく
鏡の如一。どう外ふ土鳴喇叭の七嶋あり。琉球の属嶋より。又南ふ

草薙くさなぎ
三のかりて
やては方小
りふ琉球りうきゅう
てこれで

黒木又鳥
木とも書り
その木小桂の
よく木の中
心悪しき白

七ツの島あり。第一を太平山と名く。じや宮古と称ふ後迷古と呼ぶ。その後修小説にて麻姑山といふ是なり。此島中山の南二百里もあり。その中より筑山と呼ぶ山甚高し。山の上玉碧石於亭あり。山の周囲五六里をぐるべし。五穀牛馬多し。棉布麻布草薦を産す。又红酒を釀あくとそれを太平酒と名く。第二が伊奇麻と名く。太平山の東南ふあり。第三を伊良保と名づて。太平山の西南より。第四を姑李麻と名す。太平山の正西ふあり。第五を達喇麻と名く。太平山の正西ふあり。第六を百那と名く。太平山の西南より。第七を烏噶弥と名づて。太平山の西北より。以上の七嶋を國人へなへて太平山と称す。亦西南十九の嶋なり。第一を八重山と名く。一名北木山。太平山の西南四里ふあり。中山を去ると二百四拾里。櫻木黒木赤木亦あり。八重山の西南より。第二を鳥巴麻と名く。八重山の西南より。第三を波渡間と名く。八重山の西南より。第四を由耶姑尼と名く。八重山の西南より。第五を始弥と名く。八重山の西ふあり。鳥巴麻以下の七嶋よ較ひ。此島少許大す。第六を武富と名く。八重山の西始弥の東あり。第七が久里嶋。名く。八重山の方。以北は當れ。第八を新城と名く。八重山の西。小矣。第九を波照間と名く。八重山極西北ふあり。以上八の島を國人へ皆やへゆき。總三十六嶋。琉球の属嶋なれども。往日自在ゆけられ。ハ重山と称す。總三十六嶋。琉球の属嶋なれども。往日自在ゆけられ。これを審ふそるの稀なり。汝記憶して忘るなせと後からうそ用意。ところあらん。この児を父母ふ別とされ孤島ふ漂泊ととづべし。



年十三四ふ及ち。こつとくお侍侍りて。切業火與つとべし。渺もかくも
ちく。これを養育時の至れをもて。うの嶋五穀火生せ。されども山々仙桃
ありて。四時か果と締べ。これを食ふ。飢として且余長し夫習し性
なれ。俗み氏より。月といへ。人の賢愚を初とて。教ると教へるに
あらがし。今よりとの児み武藝と習ひ。文字と教わるを汝が勢を
せよ。又いふ一巻の兵書あり。これハ是往背八幡太郎義家朝臣江帥
匡房御より傳授の秘書にて。源家小干て。最珍重しきれり。もの
あきらめ平治の播舌。義朝これを懷ふ。尾張國玉落没し。
長田ふ聲をく後。この書野人の手を落ふ。されば地ふ遊歴せ
ひゆうひえ。日騎ゆ。これを舜天丸小附属とし。又この山北南を各面ふ。
ありある桃あり。索ひたゞ。東へにしきれ。枝ふ。物のかれお伏ふ。

これなりと精し。その枝を剪て。三條の征矢。別算第一の矢。伊勢
太神宮と稱算。第二の矢。男山正八幡と稱。第三を阿蘇明神と稱
主從且暮。又祈念せ。その矢。毒龍邪鬼を征して。灵験響の物
み意ぞれが如く。それ桃と仙木也して。よく百邪を征。と往古異朝
黄帝のいた神荼鬱壘といふ兄弟あり。性よく鬼を執ふ。黄帝桃
板をりて。彼兄弟が形を画せ。これを門戸ふ貼く。惡鬼を禦ぐ。今
の桃符。桃版。とよもんち。その事なり。又漢の時。西王母も。二千年
ふ下。び子火縞が桃をりて。武帝よ進む。この外桃の德。枚舉。火
あらじかれば。主從が命を擊ぐ。の糧。これふ生と。やへぬ。これ此
鳴を舜天丸み。ふへ。今より他所ふ移す。假す。一旦袂を分とり。ども。
時至るは再會の日もあらず。疑へハ解ア。解とば事成らばよく

勅よ。と説示件の丘書と舜天丸みりに。手揚てにしやく。紀平次と抱きくまよおび。神仙の教誡い。でう疑ひもん。只ごめりとがれへ。為朝夫婦のうなり。その往かとちじえ。とウタニテ。老翁荅く。彼夫婦の事と告う。その心と折よ仙叮嘆み請向む。老翁荅く。彼夫婦の事と告う。その心と折よ仙う。汝う。あるとてあり。そ。向ともあれし。どりを。う。推えあく。因んとすれと。老叟へつと身を起して袖うしとくへ。白雲聳せんにて巖の下より起ア。老叟を引裏つ。半天すゝら升て。風ふ靡う。と失ゆ。紀平次とこの歎勢ふ。すとく奇異の物を。也。あじとねと伏おが。遂ふ舜天丸を扶掖て。東の谷蔭ふ。走ぐ。果して桃の林あり。物ほへん折りれ。その果ニツとうちも。し。う舜天丸も進らせ。一つあつれこれを食ふ。味蜜のことく。只一ト

ア腹ふ満主従の氣力日す。不百倍せり。かくて教られ。木の下も。とく彼處と柰れ。因ど。老樹の枝ふ。黄金の牌。結び。下そのはとりみ白た鳥の羽五六枚あり。さればとて彼牌と。柰れ。康平六年三月甲酉源朝臣義家放馬と駒つゝ。されば紀平次へすと。賞り。半ハ訝て。忙しく件の牌と。う。押戴。と。稚君。う。と。う。説せよ。これ又。昔時。前九年の合戦。果て後。義家朝臣亡者追福。集。往ふ木綿山。か。嚴君ハ郎内曹司。ふ。再生の恩を。宣じ。う。の。為ふ。とて。夥の鶴を放りし。ねと。う。標の札。疑ひ。しお。鶴一。あが。美奇を。示せ。す。既。よ。稚君の誕生。しき。れ。と。とも。白鶴屋の。捷と。翔。う。夫鶴の仙禽。として。鳥の聖と。稱せ。す。年。千六百。年。出して。欣。じ。や。定。う。白け。と。は。雪の。と。黒。され。漆の。ぶ。と。

常ニアホ鶴ハ仙人の驥。ナリトモソレアリ。年八百にして灵奇。モハ
千載にして神變彊。シ。フシ。縁故を考れ。モ彼老翁モハ隆殿の
放生。アホ鶴也して。佛曹司の為。モ再生の恩を報。モ。れ。アホ翁亦彼
御。ヨ。衆。九霄。アホ行。モ。アホ福祿壽星。アホ。楚。ト。ヘ。シ。ヒ
定め。アホ。ク。レ。ド。皆。アホ。嚴君の陰徳。シ。ヒ。シ。カ。ビ。シ。テ。コ。ア。陽報。ウ。
ム。ア。モ。今。ア。何。ア。歎。ア。供。ト。ン。修。ア。父。上。母。上。ア。ヒ。進。ア。モ。ウ。
ア。の。ア。と。ア。慰。ア。ヨ。舜天丸。ア。年。ア。よ。ア。ト。ア。も。ア。ト。ア。其。ア。意。ア。
ア。の。ア。ケ。ア。父。ア。も。ア。母。ア。も。ア。慕。ア。ヒ。ア。の。ア。と。ア。慰。ア。ラ。ア。稚。子。ア。ヒ。ア。慰。ア。シ。袖。
ア。の。雨。木。モ。急。の。雪。ア。紛。ら。シ。つ。紀。平。次。ア。彼。挑。の。枝。ア。剪。ア。ト。ア。く。矢。ア。
造。ア。キ。件。ア。の。多。れ。羽。ア。矧。鹿。ア。の。角。ア。拾。ア。ヒ。ア。鍔。ア。ヒ。黃。金。ア。牌。ア。幣。
ア。シ。テ。ニ。社。ア。神。ア。祝。祭。ア。挑。ア。古。木。ア。靈。ア。モ。ア。之。ア。内。ア。ヨ。主。事。ア。ベ。ア。

祈念を凝こころし。又舜天丸小武藝と教うと身の務むに或とて物もの神
曲弓ゆきのことし。或ハ野駒のの駒。木の皮を手綱てぬぎとして騎射遠とほ射のけを習く。又
ゆるとれてハ砂いさごみ迹あとつけて文字ひがなと字じまれ。聰明ちゆうめい。曆悟れきご。傳つたへ。年
十文子及およ比ひみよ。ようづの所ところ。紀平次きへいじ。主立すてらさう。彼かれ兵書ひょうしょと諳
ぢく。發明はつめいされとこと多おほき。されぞ主徒すしゆ只ただ二人。姑巴鳴きよふ五七
年の月日つきひがむく。鹿しかの皮かわを衣きぬ。鳥とりの羽はを令衣きよぎぬ。夜よは巖宅いわや
の内うち。疊ひだり。疊ひだりの磯方いそがた。千鶴ちどり。秋友あきとも。朝あさ。海うみ。日ひ。新しん代しろ
えて。故むかのうちしけとば。舜天丸しゆてんまる。之筋そのすじの征矢せいやを伏ふ。今
下くだ。び父母おやし。あじしまと祈ねがり。主ぬしと家隸けいりをちうど。家隸けいりへ
主ぬしと養育いくぶんとわふ。惜惜ね身みと存命ままでいる。胸苦きみのういづれ。身みひすみ。身みひすみ。

椿說弓張月續編卷之一畢

